

“V 上” 的認知語義虛化及相關的漢日比較研究

“V 上” における認知的な意味拡張に関する中日比較研究

(要旨)

王 棋

本論文は認知言語学の理論に基づき、中日対照の方法で、中国語の“V 上”構造、特に方向補語としての“上”の認知的な意味拡張について考察し研究したものである。

考察は“上”の語源的な意味と機能から始まり、名詞・方位詞の“上”が動詞を経て、補助動詞（方向補語）への変化経路（path）をまとめた。また、V と“上”とを共起する条件及び両者の結合関係とその制約について考察し、V の細分化を行った上、その構文的特徴を明らかにし、方向補語としての“上”の認知的な意味拡張に焦点を当て、实例によって、それぞれの構文のタイプごとに詳細に分析した。更に中国語の“V 上”に相当する日本語の表現を比較対照し、両言語の意味的共通点と相違点についてもタイポロジー的特徴を指摘し、相違の生じた原因について分析を試みた。

本論文は五章によって構成されている。

第一章では、本論の研究対象、研究目的と意義、先行研究及び研究方法を述べた。

第二章では、“上”の静態から動態へ変化する用法・意味を考察した。

第三章では、“上”は補語として、方向補語構造における表義の空間域から時間域への移転過程を探索し、その一連の意味拡張過程を認知言語学的な観点から分析し、最終的に“上”の文法的な機能を実現することを論じた。

事物主体或は受けての移動の有無により、“V 上”における表義の空間域的な意味は具象意義を「移動」、「示向」、「接触」の三つに分けられる。

次に、主体・対象の移動の有無の構図を捉え、“V 上”の“上”における8種類の認知的な拡張意味をまとめてみた。

第四章では、“上”と“V 上”における意味、用法などに相当する日本語の表現を考察し、実際の用例の分析を通じて両言語の特徴、相違について論じている。

(1) 達成。目的などを成し遂げることを表す。

このような意図性の高い「心理上昇」という意味を持つ“V上”は、事前に予期結果（特に良い結果）にできるような潜在的意図目的が特徴であり、よく“（好不容易）终于～”と共起しやすいとみられる。

一方、これは往々にして日本語で「～なる」と対応する場合は多い。

(2) 趨近。意識的 XX に近づくことを表す。

このような「意識的に接近する」という意味を持つ“V上”は、習慣や好悪、観点など「質」的な変化を表すことであり、達成意味との違いは、結果は必ずしも望ましいことではなく、悪い結果でもあり得る。

このような表現は日本語の「～ようになった」に相当する場合は多くみられるが、達成意味との違いは日本語では殆ど見られない。

(3) 産出。活動の終わるとともに、産出物が出たとすることを表現する。

このような自然動作や人的作業活動により、物理的な物ができるという意味を持つ“V上”は、結果の一種とみられ、“V上” = “V出”に適し、よく“V上+了”形式で表現される。

独立詞の自動詞か他動詞以外、日本語では相当する表現は特に見られない。

(4) 添加。元の基礎の上に補填、増加により、範囲拡大になる意味を表す。

このような意味を持つ“V上”は、よく“不但～而且，又，再说”などと共起し表現するとみられる。

日本語の場合、「～に付け加える」に相当する場合があるが、多くの場合は、連語の「それに、それも、～まで」に転化するケースが多い。

(5) 開始。時間軸に反映される動作の始まりを表現する意味である。

このような「静態－動態」・「無－有」とも捉えられるという意味を持つ“V上”は、“(立刻)就～”などと共起し、“开始～起来”と適するとみられる。

日本語の「～はじめる・始まる」、「～出す」と一致することとみられる。

(6) 積量。動作継続時間、及んでいる範囲などを表す。

このような動作行為は一定の量（距離・時間・体積など）に達する“V上”は、繰り返す動作や重複する動作にかかわらず、よく具体的な数字で量を表現される。“上”の文法化は徹底された証拠として、“上”は省略することができる。

このような“上”の表現は日本語では殆ど見られない。

(7) 尊敬。階級的な社会性的な上下関係を表す。

このような“V上”は“移動、経路、方向”意味抽出され、非物理空間の社会性心理域で認知的拡張意味である。

(8) 漸入。事物主体の性質の変化は一方向的に進んでいく態勢を表す。

このような動詞性を持つ動態形容詞も話者の主観性的な認識の参入により抽象的な意味が生み出される表現は少なくはない。

日本語の場合はより一層鮮明に形容詞・形容動詞の修飾連用形に相当する表現が多い。

第五章は結論であり、各章で行った分析や考察を踏まえ、主なる結論をまとめた。その初歩的な結論は以下のようなものである。

(一) 方位詞“上”で上方の位置の意味を表す場合は日本語の「Nの上^{うえ}」に、範囲を表す場合は、「N上^{じょう}」の方に相当する場合は多く見られるが、物体が存在場所を表現する場合は、人間の認知判断の参入により、両言語における表現は一致しない。中国語は物の位置を焦点とし、日本語は事態の変化に注目されることに見られる。中国語では、どの側面からでも、いずれかが接触することであれば、名詞の後に“上”を付加

しなければならない。一方、日本語では、常識外れの場合だけ「のうえ」が付き、詳しい説明が必要である。

(二) 方向補語の“上”における認知拡張意味は日本語での表現は非対応の様相を呈している。両言語において、共通点を持つ一方で、明確な相違と微妙な違いも混在しており、中国語はモノ中心・人間重視・文脈依存の傾向が強い。一方、日本語はコト中心・状況重視・状況依存の傾向が強いことも検証された。

日本語における文法化の経路と中国語の補語における文法化の経路は、拡張の傾向においてはおおむね一致しているものの、語彙的形式から統語的形式に移る転換点において興味あるズレを示し、中国語は意味優先であり、日本語は形式優先であり、決して完全に一致しているわけではない。

(三) 中国語の“V上”は比較的自由度が高い。日本語の「V上がる」は使用制限が多い。

(四) 単純方向補語“上”のみならず、認知に関わる方向補語の全般について諸要素間の関係も類型学の視点より中日比較の考察分析を行うべきである。